

## 豊かな海を再認識した民間発意の震災復興を

高平 洋祐

株式会社日本経済研究所 震災復興プロジェクトチーム

### 産業復興をどうするのか

東日本大震災から半年余りが経過した現在でも、津波被災地においては、瓦礫処理や仮設住宅の供給等といった生活環境に関する整備が充足しているとは言いがたい状況にある。現在、復興基本法を中心とした関連法案の多くが成立し、自治体における復興計画も策定がなされてきているが、三次補正予算の成立を待たなければ具体案に踏み込めない面もある。

また、復興にあたっては、まちの基盤を震災以前の状態に戻すことのみならず、産業の低迷や人口の流出といった地域が元来抱えていた課題についての検討を行うことが肝要であろう。中・長期的な産業のビジョンを策定し、広く地域社会そのものを再形成することを前提として、建物や基盤施設の復旧計画を立てる、という順序が理想的と思える。

しかし、自治体の多くは当面の復旧に係る膨大な事務処理に追われマンパワーが不足しており、復興に際しての産業振興ビジョンのようなものは、あまり議論されていない。被災地の主力産業である漁業や水産加工業では、震災前から産業政策の議論があまりなされてこなかった印象がある。

こうした状況下、宮城県石巻市で始まっている、民間発意による産業復興に向けた取り組みをみてみたい。

### プロショップまるか

漁港を抱える被災地では、多くの鮮魚市場が壊滅的な被害を受けた。石巻においても当初は市場機能が損なわれ、鮮魚の流通が停止していた。7月には

仮設テントを用いて何とか市場を再開したものの、製氷工場などの設備が整っておらず、震災前のような本格的な体制には遠く及ばない。

こうしたなか、鮮魚店「プロショップまるか」(写真)では、市場復旧以前に、直接漁業従事者から仕入れを行うことで、営業を再開している。結果として、野菜の直売所と同様に、中間業者を通さない、自発的な流通モデルを生み出すこととなった。震災直後の非常時とはいえ、鮮魚でもそのようなビジネスモデルが成り立つことが証明された意義は大きいとみられる。

また、現在営業を行っている場所も建築制限にかかった地域であるが、近隣の被災した飲食店(寿司、うなぎ、中華、すきやきの4店舗)に店舗スペースを与え、“名店街”として中心市街地の活力の下支えを行っている。今では地域のボランティアも多く来店する。

「プロショップまるか」を支えているのは、当地で長年魚流通の要として活躍されてきた佐々木ご夫婦である。ご主人とおかみさんの紹介が同社ホームページに次のように掲載されている。



株式会社日本経済研究所では、東日本大震災における被災地域の一日も早い復興を願い、被災地域の復興・再生に向けた方策や提案の企画・検討・実施に取り組む社内横断的なプロジェクトチームを設置、日々、調査研究や議論を行っております。2011年7月号より、この震災復興プロジェクトチームのメンバーによる復興の推進に向けた意見や提案の要約を掲載させていただきます。

### 佐々木正彦

石巻魚市場買受人。早朝の魚市場で自信を持って売ることができる魚を競り落とす。「歩く魚図鑑」と呼ばれ、魚に関する生物学的な知識だけでなく、その魚の各地での料理法、その魚にかかわる文化伝承などすべてに通じている。趣味は読書。サスペンスから素粒子論まで何でも読む。趣味を超えた趣味がポート。石巻高校、東海大学時代を通じてポートに熱中、いまも石巻ボートクラブのメンバーとして北上川でエイトを漕ぐ。

### 佐々木和子

石巻で明治以前から続く水産会社「宮本水産」の長女。夫の正彦との結婚を機に、宮本水産の小売り部門として「プロショップまるか」をともに営む。趣味も魚。塩辛でもひらきでも味が違う。お酒も少ししたしなむ。「がんばれニッポン」と叫ぶときは、だいぶたしなんだとき。



この紹介文を書いた仙台大学の高成田教授は、以前、朝日新聞の石巻支局長をしておられた。当地を代表する知識人として、政府の復興構想会議委員も

務めており、ご主人の佐々木社長とは魚を通じた縁と伺っている。

現状のビジネスモデルは、佐々木社長の魚に対する卓越した見識と、地域復興にかける想い、そしてそのような社長を支える地域の人々によって成り立っているのである。

### 復興まちづくりへの視線

上記のケースは、結果として、既存システムがリセットされ、改革が起きたといえる。復興におけるこうした動きは、民間が発意することで得られる最良の成果のひとつであり、今後は、その継続と、このようなモデルを如何に地域内に展開していくのが課題になるだろう。

筆者はかつて、夏の盛りに「まるか」から、うに、ほや、アワビといった当地の新鮮な海の幸を調達したことがある。たまたま仕入れのタイミングに合っていたとのことであったが、味も含めて三陸の水産資源の豊かさには驚くばかりであった。

津波は石巻をことごとく破壊したが、海のなかには震災前と同じ貴重な資源が残っている。震災復興は、まず、目の前の海の豊かさを再認識することから始めるべきではないだろうか。その豊かさを市民が再認識し、地域で享受できるシステムを構築し、さらにそれを大消費地にも届く流通システムへと発展させる。復興におけるこうしたプロセスを、観光や漁業、水産加工でも踏むことができれば、被災地は以前にも増して輝きを放つであろう。

#### 〈震災復興プロジェクトチーム リーダーのコメント〉

石巻の魚は本当に美味しい。本論は、そんな現地の体験をベースに、復興の課題を整理したものである。津波は全てを破壊した、しかし、豊かな海は残っている。復興の原点を海に求めるのは自然な流れであろう。まずは、海をベースにした豊かなライフスタイルの再興を、そしてそれが大消費地にも及ぶようなシステム構築を、そんな肩肘張らない、民間ベースの復興が、震災復興の最も近道のように思える。

(佐藤 淳)